

ジャーリン・ヘス＝バイバー 著
宇田川拓雄 訳
▶ 誰が摂食障害をつくるのか
女性の身体イメージとからだビジネス
4・20判 四六判338頁 本体2850円
新曜社

超スリムな身体という文化的理想を繰り返し増幅する社会



「スリムに痩せてきれいに
なりたい。」女性たちの多く
は、こう願う。若い女性たち
はオシャレをするため、男性
にもてるため、友達にみとめ
られるため、そして自分に自
信をもつために、何としても
痩せねばならない。しかしス
リムに痩せることの代償は高
くつく。おいしいような食べ物
があふれるなかでの苦しいダ
イエット、一日も休まず励ま
ねばならぬエクササイズ、ダ
イエットをきつかけとした拒
食症や過食症。みんながスリ
ムな女性をほめたたえるの
に、がんばって痩せようとし
ると危険な落とし穴が待ち受
けている。女性たちが陥らさ
れている、このようなジレン
マの背景を、本書は丁寧にと
きほくしている。

著者は以下のように主張す

る。食品産業・ダイエット産
業・フィットネス産業はマデ
リアの助けを借りて、女性た
ちが自分の救いは自己改善や
自己コントロール、超スリム
な身体という理想の実現にあ
ると信じるように、女性たち
を社会化している。家族・学
校・仲間集団も、このメッセ
ージを繰り返し増幅してい
る。この社会で女性たちは、
超スリムな身体であれば報酬
を与えられ、そうでなければ
罰を受ける。スリムな身体は
しばしば魂の救済と幸福その
ものだとして、極端にスリム
な身体になれという、強力な
「カルト宗教にも似た」メッ
セージが作り出されている。

容整形産業、ダイエット産業、
食品産業は、絶えず女性の不
安感に訴えて経済的な利益を

得ている。企業文化、伝統型
の家族、政府、メディアとい
った、社会を支配している家
父長的な利害関係者もまた、
利益を得ている。なぜなら女
性がダイエットやエクササイ
ズ、身体をコントロールしよ
うという考えに取り憑かれて
いるなら、彼女たちは、企業
が女性の身体についての不安
をあおったり、社会のさまざ
まな分野に女性差別が存在す
る現状に挑戦するためのエネ
ルギーを消費してしまうから
である。

著者は、摂食障害は超スリ
ムな身体という文化的理想に
到達するために、自発的
で極端な身体コントロールの
必然的な結果であるとする。
著者はスリムになれというメ
ディアのメッセージとも
同時に、摂食障害にうってつけの
環境を作り出すことによって
膨大な利益を上げているさま
ざまな企業による行動と圧力
を批判的に検討すべきだと論
じている。本書での議論は、
六〇人の学生年代の女性に対
する詳細なインタビューや、
食品産業・ダイエット産業・
フィットネス産業の売り上げ
等のデータ、多くの先行研究
によって裏づけられ、説得力

目を向けるべきだと論じる。

また著者は、最大手のダイ
エット・減量団体の商業用ダ
イエットクラブを理想体重の
「文化的」モデルとし、死亡
率が最も低い体重を示したメ
トロポリタン生命保険会社の
クラブを理想体重の「医学的」
モデルとし、男女別に両者を
比較している。男性の二つの
クラブの線の差は約一キロだ
が、女性の場合は一〇キロ近
い差があった。女子大学生に
対する調査では、自分の理想
的な体重イメージとして七十
%が文化モデルを選び、二三
%が医学モデルを選んだ。食
事態度テスト（摂食障害の測
定のための標準的テスト）で
は、文化的モデルに従う女性
の二四%が異常を示す得点圏
であったのに対して、医学的
モデルに従う人では八%だっ
た。著者は、文化の規定する
身体モデルを信じている女性
たちは摂食障害を進行させる
危険性が高いとする、興味深
い議論を展開している。

本書への疑問を二点あげた
い。第一に著者は、摂食障害
の問題の中心が個人か家族に
あるとする理論を批判し、個
人を越えたより大きな要因に
目を向けるべきだと論じる。

論者もこれに賛成である。摂
食障害の急増を理解するため
には社会的な要因に目を向け
る必要がある。本書を通じて
著者は、超スリムな身体にな
れという文化的圧力を論じて
いる。しかし摂食障害は、必
ずしも「スリムになるための
ダイエット」から導かれると
は限らない。「スリムになる
ためのダイエット」とは関係
なく摂食障害に至る場合もあ
る。今日の社会で女性たちは
矛盾したメッセージを同時に
与えられる。建前では主体的
に自分の生き方を選び、自立
して生きることが望ましいと
主張をしたり、自分の意思を
押し通してはならないとされ
る。建前では男性と同様に学
業に励み、社会で活躍するこ
とが望ましいとされるが、現
実は温かい家庭を作り、夫
や子どもの世話をし情緒的に
支えることが望ましいとされ
る。こうした矛盾する規範が
同時に作用する場におかれ、
どちらの規範に従っても他方
からは非難されるといふ引き
裂かれた状態のなかにとらえ
られることから、摂食障害へ
と導かれるケースがしばしば
みられる。摂食障害の社会的

要因としては、超スリムな身
体になれという文化的圧力だ
けでなく、女性たちが規範の
構造的な矛盾のなかに置かれ
ているという側面にも注意が
向けられる必要があるのでは
ないか。

第二に著者は、私たちの文
化では男性はその精神で判断
されるが、女性はその身体に
より定義されると指摘し、そ
れゆえ女性たちは身体への強
いこだわりを持ち、「スリム
教」へと導かれると論じてい
る。確かに今日女性は男性よ
りも、はるかに身体として評
価され、それが女性たちのス
リムな身体への強迫を導き、
摂食障害を導いている。しか
しこの社会では建前では女性
も精神として評価される。今
日では女性も職業での能力に
より評価され、精神として評
価される場面に増えて
いる。女性たちの摂食障害に
は、女性が単に身体として評
価されることだけではなく、
建前では精神として評価され
る一方で、現実には身体とし
て評価されるという矛盾した
状況に追い込まれることが、
かかわっている場合があるの
ではないだろうか。

(福井県立大学)

女性たちが陥らされている ジレンマの背景

同時に与えられる矛盾したメッセージ

加藤まどか